Vol.7　緩和ケア病棟はいつ使うところなのか、という話　その１

緩和ケア病棟はいつ使うところなのか、という話　その１

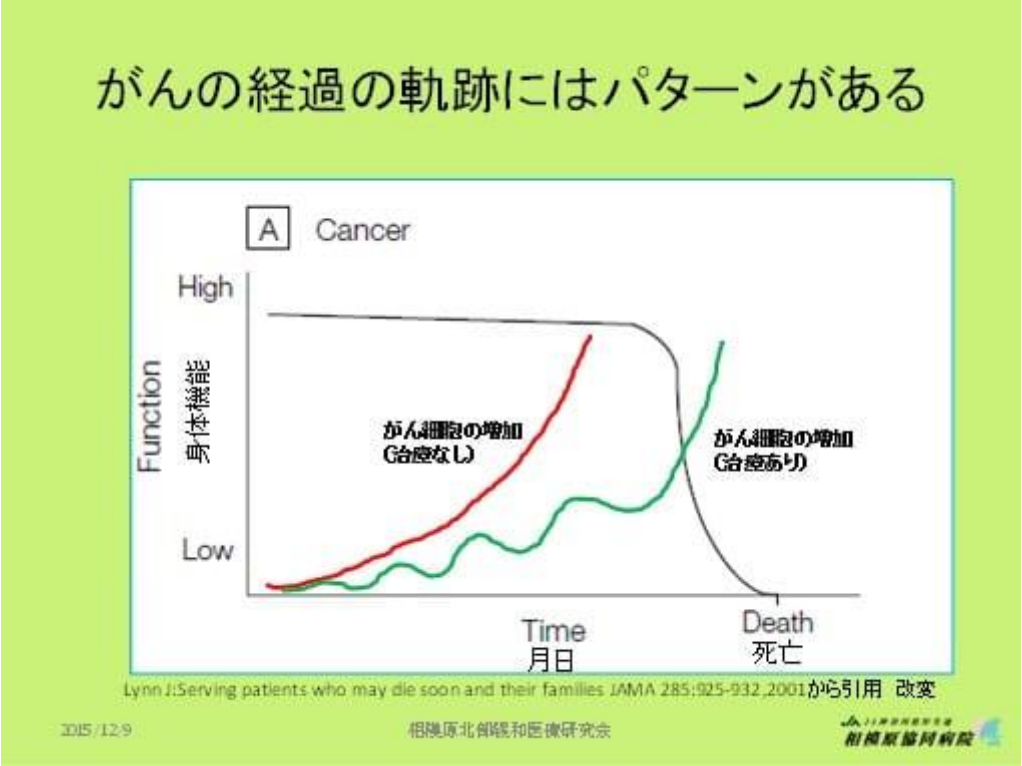
　今回は、「とても大事なことだけれど意外とみんな知らない」ことについてお話します。私達は主にがん患者さんのお世話をしていますが、がんに罹ってからの成り行きには一定のパターンがあることが知られています。私がよく患者さんに「元気さグラフ」といって紹介しているものです。「がんの経過の軌跡」といいます。（図 1）

【図 1】

　がん細胞は、放っておけば時間とともに 2 個 4 個 8 個と倍々で増えますからそのボリュームの増え方も急です。病気のボリュームが増えるにはそれなりの栄養分が必要です。その栄養をどこから調達するかというと、当然患者さんの体から横取りするわけです。病気が増えればその分横取りのペースも上がります。患者さんが元気に食べている間は多少横取りされても平気でいられます。ところが、病気の増え方がピークを迎えると、急速に患者さん本体の元気がなくなり、食欲がなくなったり、腕や脚の肉が落ちて身動きが不自由になったりします。がんとからだの力関係が逆転する時期を迎えるのです。その時期は急に訪れることが多いために、患者さんは何が起きているのかわかりません。

　あわてて救急車を呼んだり、主治医に新しい治療がないか相談したりするのですが、そこからの挽回は難しく、「おかしい、こんなはずじゃないのに」と思いながら入院だけが長引く

ことも多いです。その時点からの余命は多くの場合、1~2 カ月と言われています。このように、最期を前にして急に衰弱するのが、がんという病気のパターンなのです。逆にいえば、その時期が来るまでは、ほとんど元気でいられるということです。これだけ早期発見が叫ばれていても、いまだに「病気が見つかってからはあっという間だった」という人が後を絶たないのは、見方を変えれば、病気が相当進んでも元気でいられることの証でもあります。もちろん早期発見すれば、より危険の少ない治療で完治も期待できるし、手術や抗がん剤でがんを減らすことができる間はその都度、効果が期待できるので、時間を稼ぐことができます。わかりやすいように病気の増え方のイメージを抗がん治療の有り無しに分けて、先程のグラフに重ねてみました（下の図 2 グラフの赤と緑の線）。



【図 2】

もちろん個人差は大きいので、だれにでも当てはまるわけではありませんが、こうした傾向を知ることにはメリットがあります。まず第 1 に、体の変化に対して、慌てずに済むでしょう。第 2 に、身動きが不自由になることへ先手が打てることです。ぜひ、当院に1階にある、「患者総合・がん相談支援センター」へ御相談下さい。あらかじめ在宅医療や介護保険の手続きが済んでいれば、必要な時にすぐ、家でサービスが受けられるので、不必要な入院で時間を浪費しなくてよくなるのです。お世話をする御家族にしても、あてもなく長期戦を耐え抜く覚悟が必要ないことを知れば、在宅医療のハードルは少し下がるのではないでしょうか。もし、在宅はどうしても不安、他人に入られるのは困る、ということであれば、緩

和ケア病棟も選択肢となります。いずれにしろ患者さんの希望で選ぶ余裕ができるのです。がんにかかったから、病状が進んだからといって、かくしごとは何も要らないのです。